
恋姫～朱い目を持つ青年～

オシリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫〜朱い目を持つ青年〜

【Nコード】

N1586Y

【作者名】

オシリス

【あらすじ】

朱い目『写輪眼』を持つ、うちは一族の末裔兼北郷家の養子兼北郷家10代目党首「北郷 一刀」。今、彼の新たな物語が始まる。

主人公設定（注：ネタバレ有り）

【闇夜を切り裂き2つの流星に乗りて、天の御遣い現る。

その者、朱い目を持ち、火と雷を操り、

赤い雲模様、漆黒の服に身を包み、乱世を沈めん。】

名前 北郷 一刀

年齢 17歳

好きな物・人 義父、義兄妹、兄、仲間、動物。

嫌いな物・人 一族、うち一族、利己的な思想で他人を不幸にする者（特に袁家の人間）、男の同性愛者。

容姿 顔は少しサスケに似ていて、髪色は黒。

服装はサスケの服に暁の羽織（袖なし）を着ている。

性格 明るく優しい、基本は原作と同じ。

能力 火遁と雷遁のチャクラ性質を自分の性質として使う。

写輪眼でいろいろな術をコピーしている（コピーしているのは風・水・土遁の三つの性質の術で、火遁と雷遁の術はすべて写輪眼を使わずに努力して覚えた）。

写輪眼は、既に万華鏡（永遠）である。

右は『天照』

左は『炎遁・加具土命』と『月詠』を宿し、

須佐能乎にはかつて「イタチ」が使用していた『とつかのつるぎ十拳剣』・『やたのかがみ八咫鏡』を装備している。

永遠の万華鏡はジャンプに乗っている、イタチ＋サスケの模様。

・火遁・豪火球の術・・・直径が等身大ほどの火の玉を作り、対象に向けて吹く。うちは一族が好んで使う。

一刀はさらに豪火球を強化したうちはの秘術（この作品オリジナル多）も好んで使う。

・千鳥・・・片手に電撃を溜め、突進して対象を貫く。肉体活性による高速移動を併用し相手に突進攻撃を行う。

基本的かつ最も威力のある攻撃形態。しかし、全力をもって加速し一点集中する「ただの突き」であるため、いくら雷遁の術と体術が優れていてもカウンターの格好の餌食となってしまうと言う欠点がある。

「チツ、チツ、チツ…」と鳥の鳴き声に似た独特の攻撃音を発するため、まるで千の鳥が地鳴きしているようであることから千鳥という名が付いた。

雷遁系の術で一刀が好んで使用する術。

・天照・・・燃やしたい所を瞳力の宿る方の万華鏡で目視し、ピン트가合うだけでその視点から太陽の如き高温の黒い炎が発生する。使用すると相手の火遁の術さえも燃やし、その黒い炎は対象物が燃え尽きるまで消えない。

仮に対象が逃げようとしても、視界に入る限り逃れる事はできない。

また、炎の量は眼の開き具合で決めることも可能であり、一刀は眼を閉じることで鎮火も可能。

術を使用した時のチャクラの量・威力が高いほど、出血を伴う。

・炎遁・加具土命・・・うちは一族でも扱うことが容易ではない火遁の最高峰「天照」をも操ることが出来る能力である。

具体的な効果は天照によって発火した消えない黒い炎を唯一、形態変化させる事ができる。

・月詠・・・瞳力の宿った目を見た相手に術者が時間や空間、質量などあらゆる物理的要因を支配する自らの精神世界へと対象を引きずり込み、相手に無間地獄を体験させる幻術。

月詠は一般的な幻術とは違い、相手の意識に直接干渉し「実際に体験していると錯覚させる」術であり、なおかつ上記の通り時間さえも操れる為、術者は隙を作らずに対象に効果を及ぼすことが可能。その性質より常人でこの幻術を見抜くことは皆無（そもそも術にかかっていることが察知できない）であり、

幻術であるため相手に対しては物理的（肉体的）な殺傷力はまったくないものの、与える精神的なダメージは計り知れない。

天照と同じく使用には大量のチャクラを必要とする。

・須佐能乎^{すさのお}・・・万華鏡の開眼者のみ使用可能。

【須佐能乎】まで開眼する眼は稀で、使用すると人間の骸骨（主に胴体）のような像が浮かび上がり、最終的に鬼のような顔をした巨人に変化する（また発現者によって骸の姿形が違う）。

骸骨の像はあらゆる忍術に対して強大な防御力を誇る。

チャクラを膨大に消費する術であり、なおかつ全身の細胞に負担がかかるというリスクがある。

一刀の須佐能乎はイタチの須佐能乎をモデルにしています（作者はイタチの須佐能乎の方が個人的に好きだからです）。

とつかのつるぎ

・十拳剣・・・一刀の須佐能乎が右手に持っている霊剣。剣自体に封印術が施されており、突き刺した者を幻術の世界に飛ばして永久に封印する効果を持つ剣。別名は「酒刈太刀」さけがりのたちという。

かつて大蛇丸がずっと探していたが、実体の無い霊剣の上、須佐能乎が発動された時にしか現世に現れない剣であるため他者が手にすることは不可能である。

やたのかがみ

・八咫鏡・・・一刀の須佐能乎が左手に持っている霊器。体術や忍術によるあらゆる物理攻撃や特殊攻撃を無効化する絶対防御をほこる盾。

すべての性質変化を有し、受けた攻撃の属性に応じて自身の属性を変えることによって、あらゆる術を無効化する。

・一刀のチャクラ量は尾獣の半分くらい（この小説内の、うちはマダラくらい）

火の国・木の葉隠れの里、うちは一族の末裔サスケ

一刀が5歳頃、うちは一族は再びクーデターを起こそうとしていた。うちは再び政治から遠ざけられ、蔑まれていたためだ。

一族の幹部はかつての「マダラ」や「サスケ」の様に、永遠の万華鏡を持つ忍を作ろうという計画を行った。その方がより作戦が成功し易いからだ。だが、一族の中で永遠を手にすることができた者

は、過去の二人しかいなかった。

そして選ばれたのが一族の中でも、「イタチ」と「サスケ」の血を濃く受け継いだ一刀たち兄弟が選ばれた。

一刀の兄「うちは刃」は一刀との殺し合いの日、一刀を守る為、自ら一刀の前で命を断ち、その後、一族の医者が気絶していた一刀に刃の目が移植した（この時、刃の能力であった『月詠』が一刀に宿った）。

移植後、意識を取り戻した一刀は、刃を死へと追い詰めた一族を怨み、一族を皆殺した。その後、大雨の中倒れている所を、「北郷双刀」に拾われ、そのまま養子となる。

一族の中でも、天照と月詠を使えるのは、一刀兄弟だけである。

運命の出会い

「・・・どこだここ？」

俺の目の前には、見渡す限りの広い大地と遠くの方に村や山が見える。

「まてまてまてまて、おかしぞ？俺はさっきまで家で義父さんと修行を終え、部屋で仮眠をとっていたはずだよな？」

よし、まずは自分確認だ。

名前は北郷 一刀 17歳。

火の国・木の葉隠れの里の特別上忍で、北郷家10代目党首。
聖フランチェスカ学園2年の学生で、現在彼女募集中・・・
・・・うん、自分で言ってる悲しくなってきた。

「ってあれ？俺なんで羽織を羽織ってるんだ？
それにこのバックは俺のだよな。えっと中身は

着替え（下着×3、上の服の換え×2、その他×2つずつ）と巻物一つが入っていた。

巻物の中の術式

クナイ&手裏剣×500 起爆札×200 煙玉×50

閃光玉×50 千本×50 大型手裏剣×30

その他×50ずつ

芭蕉扇 俺が作ったオリジナルのチャクラ刀「桜」

槍「震虎炎紅槍」
しんこえんこうそう 堰月刀「雷龍堰月刀」

籠手「轟紅銀鍊照」
ほうこうぎんれんしやう

うん。俺が何時も使っている忍具フル装備だね
・・・って、そんなこと言ってる場合じゃない。

「（此処がどこか分からない以上、気を引き締めないとな。）」

桜を腰に差し、頬を叩き、気を引き締める。

そしてこれからどうしようかと思っていると後ろから声がかけられた。

？「あのーあなたが天の御遣い様ですか？」

「え？」

その声をかけてきたのは、かわいい女の子だった。

って、天の御遣い？なんだそれ？

そんなことを考えていると

「あ、あのお～～・・・」

「え？あ、ああ、なに？」

「お兄さんって、天の御遣い様ですよね？」

「え～～と、その天の御遣いってなに？後ここがどこかわかる？」

困惑した顔で、女の子に聞いてみる

「ここは、幽州琢郡の五台山の麓です。それで天の御遣いっていうのはこの戦乱の世を治めてくれると管轄ちゃんっていう占い師さんが言っていたことです。」

女の子は笑顔で説明してくれた。

かわいい子だな．．．っと、見とれてる場合じゃない。

「えっとなんで俺が天の御遣いだと思うの？」

「さつき空から流星がこの場所に落ちてきて、そこにお兄さんがいたからです。」

「（そつ、それだけで．．．っと、そついや名前聞いてなかったな）

俺は北郷一刀っていうんだけど」

「いいですよ、私は劉備、字は玄德つていいいます。」

「．．．．．へ？」

彼女の名前を聞いて、俺フリーズ。

彼女は今なんていった？劉備？

劉備つて、あの劉玄德？でも確か劉備つて男じゃなかったか？

「あのさ、本当にそついう風な名前なの？」

「はい。そうですよ」

劉備？は笑顔でうなずく。うそをついてるような感じじゃないし
本当っぽい

そしてさつき劉備は、

「ここは、幽州琢郡ですよ」「って言ってた。(『星はついてないよ』by作者)

幽州、そして劉玄德。

これらが本当だとすると、ここは漢王朝時代の可能性が高い。それも後漢末期ってところか？

そしてまさかのタイムスリップ？どこのアニメなんだよ……

「桃香様—————!!」

「お姉ちゃ—————ん!!」

俺がそんなことを考えていると劉備の後ろから2人の女の子が走ってきた。

一人は黒髪の女の子で、もう一人が赤い髪の小さい女の子だ。

「愛紗ちゃ————ん！ 鈴々ちゃ————ん！」

と言いながら劉備が手を振っている。

「(劉備の知り合いか。……ん？でも、確かあの黒髪の子が桃香って言ったな。あだ名かなんかか?)」

考えていると二人が俺達の目の前にまでやってきた。

「桃香様！ 心配しましたよ！ 一人でふらふらといなくなってしまうわ！ まったく、こちらの事も考えてください！」

「そうなのだあ！ お姉ちゃんは自由すぎるのだあ！！！」

「ががーん！ 鈴々ちゃんに自由すぎるっていわれたよ・・・ちよつと落ち込むかもあ」

「（ははっ、仲よさそうだな、あの二人はよっぽど心配だったんだな）」

三人の仲のよさそうな光景見ていて気がつかなかった、小さい女の子がこつちを見ていた

「にや？ 桃香お姉ちゃん、このお兄ちゃんだれなのだあ？」

小さい女の子がこつちに指を指しながら言ってきた。

「こ、こら！ 鈴々！ 失礼じゃないか、指をさすんじゃない！！！」

黒髪の女の子が慌てながら小さい女の子の手を降ろした。

「こちらは北郷 一刀さん、天の御遣い様だよ。」

笑顔で言う劉備の言葉にふたりは驚いた顔をしていた。

「あなたが管賂の言っていた天の御遣いなのか？」

「お兄ちゃんが天の遣い様なのかあ。」

「（・・・ん、なんかむずかゆいな。）」

四つの目にまじまじと見られて少しムズムズする。

「あれ？　なんで、愛紗ちゃんと鈴々ちゃんがそのこと知ってるの？」

「さきほど、桃香様を探しているときに管賂に出合ったのです。その時に聞いたのです。」

天より降りし流星はこの乱世を治めてくれる天の御遣いだといろいろな町や村で言いまわってるそうです。」

「へえ、そうなんだあ、てっきり私だけが知ってるのかと思っちゃった。」

これが俺と彼女たちとの出会いの日の事である。

そして、これから始まる・・・

・
・
・
長い長い物語の始まりの日の出来事であった。

運命の出会い（後書き）

『桜』 真の名は『和道・桜蘭香十文字・菊重』……うち
は一族党首の証であり名刀。刀身はほんのりピンク色に染まっ
て、連続攻撃に適しており、一振りすれば桜の花びらが舞い、
まるで使用者が舞い踊っているかのように見える。その美しさ
から多くの者が譲ってくれを頭を下げ、断られれば力ずくで
手に入れようとしたほど。

『震虎炎紅槍』……火のチャクラを纏う事ができ、纏
った火の形を自在に変え攻撃するうちは一族の党首の証。見
た目は蒼竜煌閃槍の朱い版。

『雷龍堰月刀』……雷のチャクラを纏い攻撃する。北郷
一族党首にのみ持つことができる忍具。見た目は真・三国無
双6の青龍堰月刀の黒い版。

籠手『轟紅銀鍊照』……五大性質すべてのチャクラを纏
うことができる特殊な素材で出来ている。見た目は「REBORN
！」のツナのグローブ（未来編以降、大地の七属性編のモノ）。

桃園の誓い

「ええ！？ 関羽と張飛って、あの関羽と張飛か！？」

驚き顔で二人に聞いてみる。

「どの、かは知りませんが、私の名は関羽です」

「あの張飛なのだ！」

・・・うそをついてないな、写輪眼を使わなくても分かる。

しかし、どうなってんだ？ 劉備も女の子だったし、関羽・張飛まで女の子って

・・・正直もう、わけが分からない。

「はいはいー、自己紹介も終わったことだし、私から提案があるんだ。」

一刀さんに私達のご主人様になってもらおうと思つたの

劉備が満面の笑みでこう言い・・・って、えっ？ ご主人様？？

「ご主人様って？あの？ご主人様？？」

「桃香様！？ それはいったいどうゆうことですか！？」

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、私達は弱い人達が傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢ができなきた。

少しでも力になれるのならって、そう思って今まで旅を続けてきたでしょう？」

「はい」

「なのだ」

劉備の言葉に二人が返事をする。

「でも・・・三人だけじゃもう、何の力にもなれない。
そんな時代になってきている・・・」

「・・・」

「・・・」

二人は無言のまま何も言えなかった。

「確かに桃香様の言うとおり、既に我々だけではどうしようもないところまで来ているのかもしれませんが。」

大陸には、さまざまな負の感情が満ち、既にあちらこちらで暴動などが起きています」

「・・・」

その言葉に劉備は何も言えず黙っていた。

「そうなのだ・・・三人じゃ、もう何も出来なくなっているのだ・・・」

俺は三人の話を静に聞く。

「でも、そんなことで挫けたくない。
無力な私達にだって、何か出来ることがあるはず。・・・
だから」

「・・・なるほど、桃香様のお考えがわかりました」

「鈴々もわかったのだ」

「（・・・？　なにが分かっただ？）」

なんだか知らないが三人にはなにかわかったようだ。

そして劉備は俺の方に近づいて来た。

「一刀さん！」

「お、おう!？」

「私達に力を貸してください！」

「はあ!？」

なにを言ってるんだ劉備は!？

「お、落ち着け！俺は君達が考えているほど、すごいもんじやないぞ!？」

神でもないただの人間だ!!」

そう、俺はただの人間。忍術を使えても、死人の命を蘇らせる事も、災害から人々を守ることも出来ない、ただの人間だ。

「分かっております。しかし、我等にはあなたが必要なのです。・・・いえ、本当に必要なのは、あなたの天の御遣いという肩書きなのです」

「肩書き？」

「はい。我ら三人、憚りながらそれなりの力がある。
しかし、我らにも足りないものがあります。・・・それは」

「名声、風評、知名度・・・人を惹きつけるに足るそういった実績が鈴々たちには無いのだ」

「そう。本来は、そういった評判を積み重ねなければならない。
・・・しかし大陸の状況は、すでにその時間を私達にくれそうにもないのです」

「一つの村を救えても、その間に他の村の人達が泣いている。
・・・もう、私達の力だけじゃ限界がきているんです」

「・・・なるほどな。だから、天の御遣いという評判を利用し、

大きく乱世に羽ばたく必要があるってワケか・・・」

確かに。ここが三国志の、しかも後漢末期だからこそ、
そういった神懸かりの様な評判は、劉備たちにとって大きな力になる。

迷信や神様への畏怖つてものが、人の心に強く関係していた時代、
天の御遣いが劉備のそばにいる。

・・・それだけで、人々は劉備に畏敬の念を抱くようになり、その行動を注視するようになる。

注視するようになればこそ、劉備の行動に共感する人間や心服する人間が、飛躍的に増えていく。

それが知名度であり、名声ってものだ。

「（・・・さて、どうする？ 偶然とはいえ、いきなりこの世界にきて帰る方法もわからない。

・・・なら、今、目の前にいる、劉備、関羽、張飛に力を貸すのもいいかもしれないな。）

スーハー・・・」

大きく深呼吸した後、固唾を吞んで返事を待っている三人に向き直る。

「・・・わかった。俺でよければ、その御輿の役目、引き受けるよ」

「ホントですか!？」

劉備がうれしそうに言ってきた。

「だけど、少しの間だけ時間をくれないか？ しばらくこの世界を見て情報や状況を確認したいんだ」

そう。俺はさっきこの世界に来たばかりでなにも分かっていない。少しこの世界を見て回って自分の目で見て確かめたいしたい。

「どうだろう?。」

俺は三人の眼を真っ直ぐに見つめた

「わかりました、一刀さんこちらをお願いを聞いてくださっただからです」

「それに、北郷殿の眼には優しい光が灯っているような感じがします」

「うんうん、お兄ちゃんすっごい眼なのだ!。」

三人がそれぞれの答えを返してくる。

「・・・ありがとう」

おれは、三人に感謝を込めてお礼を言う

その後、俺たち四人は近くの村で食事をとる事にしたんだが、この世界に来たばかりの俺は当然、この世界の金は持っていない。そして劉備たちも金を持っていなかった。

結果、俺は無銭飲食と勘違いされ、結果捕まった。

まあ、店の手伝いをする事で許してもらったんだけどな。

そして、お店の手伝いを終え、店を出るとき、おかみさんからお酒をもらった。

「さっきのおかみさんの話だとこの辺だよな？」

「はい、おかみの話によるとこの辺に桃園があるはずなのですが」

「それにしても、あのおかみさんいいひとだったね」

「お酒なのだー！ー！早く飲みたいのだー！ー！」

今、俺達はおかみさんに教えてもらった桃園に向かっている。

どうやらさっきの店での話を聞いていたらしく、応援しているよと言ってくれた。

そついえば劉備が「あつ！そついえば白連ちゃんがこのあたりに赴任するって言うてた！」と言ったときは正直ガクツときた。

関羽が「もつと早くに仰ってください」と言ったら「あう」と落込んでいた。

本当に仲がいいんだなって思ったよ。

それともう一つ変わったことがある。
おれの呼び方が変わった。兄だ。

最初はご主人様だったんだが、流石にそれだけはやめてくれと言ったんだが、劉備に「えゝゝ、じゃあ、お兄ちゃんって呼びますね
年は私たちより上でだしゝゝ」って言われたので、仕方なくそう呼んでもらうことにした。

そんなことを考えているうちに、目的地に到着した。

『おお――！』

一面に広がる桃色の世界。

「これが桃園かー・・・・・・・・すごいねー」

「美しい・・・・・・・・まさに桃園という名にふさわしい美しさです」

「ホントだな。・・・・・・・・里のはずれにある桜の森みたいだ」

「ほぉ・・・兄上の居た天にも、やはりこれほど美しい場所があったのですか。」

「咲いていたのは、桜って花だけだな。・・・・・・・・すごく綺麗だったよ」

「雅だねえ」

などと、三人でしばしの風雅を楽しんでいると、

「さぁ酒なのだー！」

ワクワクした表情を浮かべた張飛が、俺の周囲をクルクル走り回る。

「・・・・・・・・約一名、ものの雅も分からぬ者も居るようですが」

「あははっ、鈴々ちゃんらしいね」

「らしいのかねえ。……そういや、劉備たちはみんなのことを愛称なんかで呼んでるけどいったいなんなんだ？」

俺が聞くと、三人は驚きの表情でこっちを見た。

「お兄ちゃん、もしかして真名を知らないの？」

「ま、真名？……真名ってなに？」

俺が尋ねると関羽が答えてくれた。

「我らの持つ、本当の名前です。家族や親しき者にしか呼ぶことを許されない、神聖なる名……」

「その名を持つ人の本質を包み込んだ言葉なの。だから親しい人以外は、たとえ知っていても口に出してはいけない本当の名前」

「……ちなみに、もしも勝手に呼んだらどうなるんだ？」

「殺されても仕方ありません」

関羽の答えを聞いた瞬間、自分が顔面蒼白になるのがわかった。……呼ばなくてよかったーと心のそこからそう思った。

「だけど、お兄ちゃんになら呼んで欲しいのだ」

「え？・・・いいのか？大切なモノなんだろう？」

「鈴々はいいのだ！」

「私もだよ！」

「私もです」

「・・・」

誰でも呼べるわけじゃない、特別な名前。

正直、天の御遣いなんて役をどこまでできるか
・・・全くもって自信は無い。

それでも。

俺を信じてくれる人が居るのなら、精一杯その期待に応えたいと思う。

「・・・わかった。じゃあ、えっと・・・」

「我が真名は愛紗！」

「鈴々は鈴々！」

「私は桃香！」

「愛紗、鈴々、桃香……………」

それぞれの真名を呼びながら、少女たちをまっすぐに見つめる。

「俺はまだ、何をすれば良いのか。何が出来るかはわからない。けど、俺は君たちの力になれば、と思う。」

「……だから俺も、改めて名乗らなくちゃね。」

俺は三人に向き合い、真剣な顔で改めて自己紹介する。

「俺の名前は北郷 一刀。火の国・木の葉隠れの里所属、北郷家10代目党首だ。」

これからどんなことがあるか分からないけど、宜しく願います！」

「うん！」

「はっ！」

「いいのだ！」

三人がそれぞれへんじをしてくる。

俺は三人に真名代わりとしておれ自身の秘密を教えた。

忍術のこと、写輪眼のこと、そして旧家である北郷一族のことを、流石に万華鏡やうちのは事は教えることはできないから、その辺りはうまく隠した。

途中、三人から質問攻めにあつたが、疑問はすべて答えた。

チャクラはこちらでは『氣』を言った方が伝わりやすいことも分かった。

つというか、横文字全般が通じなかった。

そしてすべての質問に答えた後、

それぞれの手に持った盃にお酒をそそぎながら、

「それにしても、まさかあの有名なシーンに自分が同席するとは思わなかったな」

「どうかしたの？ご主人様」

「いや、いろいろとね。・・・感傷深いというか。

この後、まずは何処へ行こうかなーとかね」

「前を向いて一歩一歩、歩いていくしかないでしょうね」

「立ち止まってもしょうがないのだ」

「・・・鈴々の言う通りだな。

まあ、これから先、大変な道になりはるけど、改めてよろしく」

「じゃあ、結盟だね！」

「ああ！」

そんな俺をみていた愛紗が、掌で包んでいた盃を、空にむかって高々と掲げた。

愛「我ら四人！」

桃「姓は違えども、兄妹、姉妹の契りを結びしからは！」

鈴「心を同じくして助け合い、みんなで力なき人々を救うのだ！」

一「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

桃「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

4 『乾杯っ！』

？桃園の誓い？

まさか自分がこの三姉妹の兄妹入りするとは、思わなかったけど、誓いを立てた以上破るわけにはいかない。

彼女たちのため、自分が死なないためにも、もっともっと強くなるっ！

彼女たちを守り通すために！！

俺は心の中でそっと、別の誓いを立てた。

桃園の誓い（後書き）

はい、一刀たちを4兄妹にしました。

一刀を一番上の長男で、

桃香を長女、愛紗を次女、鈴々を三女にしました。

桃香たちはそのままですが、一刀をその上の兄にしてみました。

それでは次回をお楽しみにー！ー！

三羽鳥との出会い

俺が旅に出て早数ヶ月が過ぎようとしている。

桃園で誓いを立てた後、俺たちはそれぞれの目的のために別れた。

桃香たちは、桃香が私塾にいた頃の友人、公孫賛へ会いに、

俺は大陸を回り、情報集めと主だった武人に会うためにな。

道中、桃香たちの噂をよく聞くようになった。

噂には、桃香たちが無事、公孫賛の下で義勇軍を立ち上げたこと、

諸葛亮と鳳統が仲間に加わったことなど、いろいろあったが、

俺としては、桃香たちが無事なことが分かってよかったと思っている。

旅を始めて困る事は食料だ。

まあ、俺は義父^{おやじ}に鍛えられたから、何とかなった。

・・・この時、初めて義父^{おやじ}に感謝したかもしれない。

そんなこんなで、俺はある村にやって来た。

食料はさて置き、情報を収集するためにな。

「（・・・変だ。人の気配がない）」

村にしては大きめの感じだが、肝心の人の姿が見えない。

とりあえず人を探すために村の中を歩き回っていると。

？「その者、止まれ！」

「ん？」

声をかけられ振り向くと、手甲をつけた俺と似た髪の色をしている少女が俺を睨んでいた。

「見ない顔だな、何者だ!？」

「この村の人か? ちょうどいい、他の人達はどこに――」

? 「質問に答える!」

すごい剣幕だな。今にも殴りかかってきそうだ。

「落ち着け俺は――」

? 「凧ちゃん! 待つの!」

? 「待つんや凧!」

俺が落ち着かせようとした時、後ろから二人の少女がやって来た。

? 「凧ちゃん、その人は違うと思うの!」

? 「黄色い布を巻いとらんし、間違いないやろ!」

二人がそう言うと、少女は「はっ」と気づいたようなが表情をした後、頭を下げてきた。

？「すつ、すみません！」

「いや、良いよ。間違いは誰にでもある」

俺がそういうと、三人はほっとした表情を見せる。

？「怒ってなくてよかったの」

？「でも、そうだとしたら兄さん何者なんや？」

「俺は旅人だ。この村には情報を集めるために立ち寄ったんだ」

？「そうですか。では早くここから逃げてください！」

銀色の髪の少女が、俺に言う。

「逃げる？なんでだ？」

？「もうすぐこの村に黄巾党が攻めてくるの」

黄巾党というと・・・あの黄巾党か・・・。

？「せやから早く逃げた方が・・・」

「いや、俺もこの村を守るのに力を貸そう」

『えっ？』

俺の言葉に三人は驚く。

？「何ゆうてんねん！」

？「そうなの！早く逃げるの！」

？「そうです！戦は遊びではないのですよ！」

「別に戦を遊びとは思っていない。

それに、今は一人でも多くの助けがいるんじゃないか？」

『グッ・・・』

俺の言葉に三人はグーの根もでない。

？「わかりました。ですが、危険だと判断したら、すぐに逃げてください」

「ああ、わかった。俺は北郷一刀だ。君らは？」

俺は三人に名を尋ねる。

？「私は楽進といいます」

？「沙和は于禁なの」

？「ウチは李典や」

・・・・・・うん、まあ、予想はしてた。

桃香たちが女の子なんだから他の武将も女の子になって、

・・・・まさか、本当にその通りだったなんてな・・・・。

もう俺は驚かない。絶対に驚かない！

そう心に誓った。

それからしばらくして、主だった作戦を三人に説明した。

「まず、この町に決定的に足りないのは防壁だ。これじゃあ、あつという間に攻められる」

「それではどうするのですか？」

「李典、ここに書いてある防柵を作れるか？」

俺は李典に即席で作った設計図を渡す。

「これやったら作れんことないで。いくつくらいいるん？」

「できるだけ多く頼む。特に東の防壁が薄すぎるからな。大体西南北に30、東に50くらいでいい」

「あかん、それは無理や。材料が足りへん！」

李典は「しまった！」っという表情をする。

まあ、いきなり賊（黄巾）が攻めてきて蓄えがなかったんだろう。

「しょうがない。李典、東は俺が着く。防柵は先に西南北に配置してくれ。」

その後で余った分を東へ配置してくれ」

「なっ！ そんなんあかんで！」

「ちよっ！ いくらなんでも無茶なの！」

「そうです！ 無謀すぎます！」

東へ着くと言った瞬間、三人から止められた。
「……しょうがないか。俺は印を結ぶ。」

「……火遁・豪火球の術」

『っ！！』

俺が豪火球を何もおいてない所へ放つと三人は驚きの表情を露にする。

「……術^{これ}については後で説明する。今は俺を信用してくれ」

『……（コク）』

俺の真剣な表情から察してくれたのか、三人は何も言わず頷いてくれた。

「よし、じゃあ、俺は東、李典は西、于禁は南、楽進は北の城門に着いてくれ。」

李典、防柵はできるだけ早く、三つの城門へ設置してくれ」

防衛の説明が終わると、俺は次の作戦の説明の移る。

「さて次だが、賊は恐らく防壁の薄い東に集中してくる。だから東は俺一人で相手をする。」

さっき見てもらったから分かると思うが、見方が入れば巻き込んでしまうかもしれないからな。

楽進、于禁、李典も油断せず各門へ近づく賊を倒してくれ。主な作戦は以上だ。みんな援軍が来るまで頑張ってくれ！」

『はっ！』

説明を終えると、三人と兵たちは、各自準備を始める為移動する。

さて、いよいよこの人生初めての戦だ。

今まで任務で人を殺めたことはあっても、戦争はしたことが無かったからな。

それからしばらくして、すべての城門に防柵が設置された。
東は数は少ないが、それでも30は配置できた。

「楽進様より伝令。北から陳留の曹操様の援軍が到着したとのこと。」

至急、北郷様にお越し頂きたいとのこと。」

どうやら援軍が間に合ったようだ。

「わかった、すぐに行く。
すまない、敵が着たら狼煙を上げてくれ」

「わかりました！」

兵に敵が着たら知らせるように頼むと、俺は急いで楽進のもとへ向かった。

「遅くなってすまない!」

俺が声をかけると、それに気づいた楽進がこっちに体を向けた。

「北郷殿、いえさつき伝令を送ったのですから、随分早いと思います」

「そういつて貰えると助かる。そっちの二人が援軍の?」

俺は楽進の後ろにいる二人へ視線を送る。

「はい、陳留からの援軍を率いている将の方々です」

楽進の言葉で、後ろの二人は挨拶してくる。

?「ああ、私の名は夏侯淵。陳留太守、曹操様に仕える将だ」

?「僕は許諸!よろしくね兄ちゃん!」

へー、まさか夏侯淵がこんなに綺麗だとわな。

許緒はまだ子供なんだな。

「俺は北郷一刀。よろしく二人とも」

「うん！」

元気よく返事してくれる許緒。なんか鈴々に似てるな。

「我らの本隊ももうじきこちらに到着するだろう」

「そうか、それは助かる。それじゃまずは作戦について説明する」

俺は今ついた夏侯淵たちに作戦の説明する。

説明中

「……っていうのが、俺の考えた作戦だ」

「だめだよ！そんなんじゃ兄ちゃん達が危ないじゃん！！」

「私も同感だ。あまりにも危険すぎる」

俺が説明を終える。途中、李典と于禁も合流した。
当然ながら、さつき着いたばかりの二人からは物凄い反対を受ける。

まあ、当然か。

「心配ない。俺には忍術があるからな」

『忍術？』

「ああ、楽進たち三人はさつき見せただろう？」

俺が言うと、三人はああと頷く。夏侯淵たちは知らないから、まだ頭に？が見える。

「忍術って言うのは簡単に言うと、己の中にある気と呼ばれるモノを火などの性質に変えて、相手を攻撃したり、自分の肉体を強化したりするモノだ」

『っ！！』

「はにゃ？」

俺の言葉許緒以外が驚く。

「気づて、あの氣かいな！」

「驚いた。まさか、氣を自在に操ることができる者がいるとは・・・」

「それなら風ちゃんも使えるの！」

「本当なのか楽進？」

俺は楽進に尋ねる。

「はい。ですが完全に扱えるというわけではありません」

「なるほど、まあそういうわけだ。東の城門は俺に任せてくれ」

「だが、いくらその忍術が使えても一人では、危ないことには変わりないだろう」

やはり忍術を持っていること説明しても、夏侯淵は反対のようだ。

「心配ない。俺はさらに特殊な力を持っているからな」

『特殊な力？』

ここまで来たらしょうがないな。そう思い俺は目を写輪眼に変え

た。

『っ！！』

「これが俺の力・・・写輪眼だ」

流石にいきなり目の模様が変わったらそりゃ驚くわな。

「目の・・・目の模様が変わった・・・」

「真っ赤なの〜！」

「驚いたー。兄さんほんまに何者なん？」

「何者かって聞かれてもなー」

うーんと俺は考えてしまう。

「（なんて答えるべきなんだ？）」

俺が悩んでいると、許緒から言葉をかけられた。

「ねえ兄ちゃん。もしかして兄ちゃんって天の御遣い様？」

「うん？ああ、そう呼ばれることもあるけど？」

『……ええええええええええええええええー
ーっ！！』

俺が答えると許緒以外がまた驚く。

「そういえばどうして気付かなかったんだ！

北郷殿服装。黒い布地に赤い雲模様の服、……そしてその朱い眼……」

「本当だ……！全然気付かなかったの……！」

「確かに、せやったら兄さんが忍術っていうの使えるのが説明つくで！」

「本当に驚かされてばかりだな。まさか天の御遣いが本当にいたとはな……」

「ほえ、本当に兄ちゃんが御遣い様なんだ！」

なんか各自勝手に納得してるけど今がチャンスだな！

「まあそういうことだ。被害を最小限に抑える為にも協力してくれ夏候淵！」

「・・・わかった。そういうことであれば仕方ない。東は北郷殿に任せよう」

「ありがとう！」

俺は笑顔でお礼を言った。

『／／／／／／／／／／！！』

うん？なんかみんなの顔が赤いような・・・。。。。。。つま、気のせいか・・・

その後、詳しい説明（写輪眼のことなど）をした後、各自配置に着き、黄巾の奴らが来るまで警戒を怠らずに、英気を養うことにした。

「（いよいよ初戦だ。しっかり気を引き締めないとな）」

俺も戦のために準備を始めた。

三羽鳥との出会い（後書き）

はい、今回は風たちとの出会いを書いてみました。

・・・え？早すぎるって？

ははは、そんなことキシナイキシナイ。

ではでは、また次回。

初陣

「来たか・・・」

あれから数時間、東に大きな砂塵が見えた。

「ずいぶん遅かったな。まあ、そのお蔭でこっちは足りなかった防柵を作ることができたし、いろいろ準備もできた。

これで俺も思う存分相手できる」

そう、材料がなくて足りなかった防柵は、夏侯淵たちの部隊から材料を貰って完成させた。

俺も装備を桜から雷龍堰月刀に変えた。すべての城門に加重岩の術をかけてさらに防御を強化した。

「さて数は・・・1千つてところか。全体で2千くらいって効いたからな。やっぱり東に集中して来たな。・・・だが、俺の敵じゃない」

そう、俺は小さい頃から義父おやじの修行しうぎんでこういった事をして来た。暇があれば暗部やらを連れて来ては戦ってきた。もっと多い時は術を使わずに3万人と、術を使った時は5万と戦ったこともある。

それと比べれば千人、ましてや術も使えない者達の相手をするなんて赤子の手を捻るより簡単だ。

「さて、大分近づいてきたな。いっちょ派手にやるか」

俺は写輪眼状態に入り、印を結んだ後、両手を地面に置いた。

「土遁・地殻変動の術！」

術を発動させ辺りの地形を変える。城門前に大きな岩の壁を作り、アスレチックのように地形を凸凹にし、敵側に大きく深い堀を作った。

「水遁・滝壺の術！」

その後、堀の中を水で満たし、俺は堀の外側に出る。

「精々楽しませてくれよ？（火遁・豪火蒼球の術！）」

俺は飛び上がり、敵陣の中心にうちは秘伝忍術の一つ、豪火球の強化版を連続で打ち込む。

広範囲で威力の高い術を中心部、敵は陣形自体、形成してないの
で正しくは人の塊の中心に打ち込んだ事により、黄巾の連中は「ば
つ、化け物だー！」っていいながらビビッて逃げていく。
これでもう半分くらいしか残ってない。

もちろんこの位では終わらない。雷龍（堰月刀）に雷性質の気を
纏わせ、バツサバツサと黄巾連中を切り捨てていく。

その時、ドーン！ドーン！っと大きな銅鑼の音と多くの歓声が聞
こえたので町の方を向く。

どうやら曹操の本体が到着して、ここ以外は終わったんだろう。
城門の上には、楽進たちと一緒に、さっきまで居なかった金髪の
少女、長い黒髪の女性、猫耳被った少女がいる。

恐らくあの金髪少女が曹操だろう。覇気が他の者とは比べ物にな
らないからな。

「それじゃ、みんな待つてようだし……そろそろ終わら
せるか」

俺は大量の気を練り、印を結ぶ。

使うのはうちの秘伝忍術の中でも、豪火球の術の中でも、威力
も攻撃範囲も最高クラスであり、難易度Sの超高等秘伝忍術。

「・・・・・・・・火遁・豪火滅却」

俺はこの術を敵前方へと打ち込む。

黄巾の連中は抵抗もできず、ただただ業火に焼かれて死んでいった。

「これが戦か……。……。案外呆気なかったな」

俺は地形を元に戻す。

「（結局、地形を変えても無駄だったな。相手が弱すぎて話にもならない）」

そんな事を思いながら、俺は町へと戻った。

——城壁サイド——

「なっ……。なんて圧倒的な戦なんだ」

風（楽進） たちは曹操軍の本隊と合流して、黄巾党を倒した後、東の様子を見に来ていたのだが・・・

「なんなのこれ、・・・・・・・・こんな戦いじゃない。圧倒的過ぎる・・・」

そう口を開いたのは、曹操軍の猫耳軍師こと桂花（荀？）。

「確かに、・・・秋蘭（夏侯淵）から天の御遣いとやらの事は聞いていたけど、これほどとわね・・・」

驚きながらも、欲しいわねあいつ的な顔をしながら笑みを浮かべている金髪の少女。我等が大将こと、華淋（曹操）は言う。

「私も驚きました。まさかこれほどのモノだったとは・・・」

一刀や忍術の事を華淋に報告した秋蘭さえも驚いている。

『・・・・・・・・（呆気）』

そして呆気にと取られてるのは魏武の大剣こと春蘭（夏侯惇）、季衣（許緒）、真桜（李典）、沙和（于禁）の四人である。

春蘭に関しては、さっきまで「そんな奴私が倒してやる」的なことを言っていたのだが、実際一刀の戦いを見て、啞然としている。

「どう春蘭？まだ御遣いと戦う意志はある？」

っと、意地悪そうな顔をした華淋が、これまた意地悪そうに春蘭に言う。

「はっ、はい！あんな奴私が捻り潰して見せます！」（プルプル）

っと、本人は言っているが、声が震えてる。何より足が生まれたての小鹿みたいになっている。

「ああ・・・、姉者はかわいいなあ・・・」

そんな春蘭を見て秋蘭は萌えている。

「はあ、春蘭。いくらなんでもあんなのに勝てる分けないでしょ。」

いくらあなたが馬鹿で脳筋でもそれくらい分かるでしょ？」

「なんだと！！もう一度言ってみろ桂花！！」

「なんどだつて言つてあげるわよこの脳筋！いくらなんでも気づくでしょ！！」

つと、二人は喧嘩モードに突入する。

「はあ、二人がこうなつた以上しばらくこのままね。

秋蘭、季衣。私たちは彼に会いに行くわよ！」

『はっ（はい！）』

そついうと華淋たちは、喧嘩している二人をほつて歩き出した。

「沙和、真桜。 私たちもいくぞ！」

『おつ、おつ！（なの〜）』

その後に凧たちも続き、一刀を迎えに行った。

初陣（後書き）

火遁・豪火蒼球の術・・・豪火球の術の強化版。うちには伝わる秘伝忍術の一つで、大きさは1・5倍で色は名の通り蒼色。

火遁・豪火滅却・・・豪火球の術の強化版。うちには伝わる秘伝忍術の一つで、火遁最高クラスの術の一つ。自分の前方ほぼ全てを多い尽くすほどの巨大な炎を放つ。威力・攻撃範囲共に最高クラス。

土遁・加重岩の術・・・触れた物体を石化させたり、岩のように重くし行動不能にする術。

土遁・地殻変動の術・・・自分の周囲の地形を自在に変える事ができる。

水遁・滝壺の術・・・水脈のない場所に湧き水を起こし、水流を操ることで滝を生み出す術。

曹操との対面

「一刀殿——！」

俺が町へ入ってすぐ、風たちがこっちへ走ってきた。

「おう、そっちは終わったようだな」

「はい！一刀殿と曹操様のお蔭で町は救われました。本当にありがとうございます」

「ほんまおおきに」

「ありがとうございます」

楽進たちは頭を下げてきた。

「いいってそんなの、困ってる人がいたら助けんのは当たり前だから」

「あら素直に受け取っておいたらいいんじゃない？」

俺が楽進たちに頭を上げるように言つと、さらに後ろから、さつき俺の戦いを見ていた金髪少女とその後ろから夏候淵と許緒がやって来た。

「（やっぱり、・・・あの子が曹操か・・・）」

曹操は俺の前まで来た。

「はじめまして、私は曹操。・・・あなたは御遣いで合っているわよね？」

「ああ、そう呼ばれることもある。俺は北郷一刀。字はない。北郷が一刀って呼んでくれ。」

「字がないの？ まあいいわ。
今回はありがとう。一刀がいなかったら、今頃どうなっていたか分からなかったわ」

「いいよ。さっきも言っただけど困ってる人がいたから助けた。ただそれだけだからさ」

「・・・」

俺は曹操に改めて言つ。すると曹操は黙って俺の顔をジッと見てくる。

「やっぱりいいわ。あなた欲しいわね・・・」

「え？」

つと曹操は「みーつけた。私の獲物」的な笑みを浮かべ俺に言う。

「どう一刀。私のところへ来ない？ 私についてれば、いずれ大陸を支配できるわよ？」

・・・なんってこった。まさかあの、天下の曹操様からお誘いがくるなんてな。

「・・・悪いけど断らせてもらっよ」

『っ！！』

俺が曹操に返事を返すと周りにいた楽進たちは驚く。

「・・・・・・・・理由を聞かせてもらっていい？」

曹操も若干驚いている。まさか自分の誘いが断られるとは思っていなかったんだろう。

「俺にはもう、契りを交わした兄妹がいる。今は情報を集めるために離れてるけど、そいつ等を裏切るわけにはいかないからな」

俺は真っ直ぐ曹操に言う。

「っ！！そつ、そうわかったわ、けど少しだけ私と来ない？私のところに来れば、情報も多く入ってくるわよ？」

？今、若干曹操顔が赤くなったような気がしたような・・・気のせいかな。

「ああ、それならいいぜ。」

俺は曹操の提案に乗る。

「やったー！！ これでまだ一緒にいられるね兄ちゃん！」

「しばらくの間よろしく頼むぞ北郷」

それを聞いた許緒は大喜びし、夏侯淵も歓迎してくれた。

「あなた達はどうか？ 私と来ない？」

つと曹操は俺の言葉を聞いて微笑んだ後、楽進たちの方へ向き楽進たちの勧誘を始めた。

「はっはい！ 宜しくお願いします！ 自分の真名は凧です！」

「うちは真桜や！ 宜しゅうな大将！」

「頑張るの〜！ 私は沙和なの〜！」

三人とも嬉しそうだ。前々から入って見たかったんだろう。

「期待してるわ。一刀とあなた達には私の真名を許すわ。私は華琳よ。これからよろしくね」

『はい！』

「俺までいいのか？」

三人は元気よく返事を返すが、俺まで呼んでいいのだろうか？

「ええ、彼方にはこの町を救って貰った事だし、しばらくは私た

ちと行動を共にするのだからね」

「そうか、俺は真名がない・・・さっきも言ったが北郷か一刀で頼む」

「ええ、わかったわ。では、撤退の準備を始めましょう」

そついうと曹操・・・・・・華琳たちは自分の部隊へ行ってしまった。

その後、今までいなかった夏侯惇たちを含めてみんなの真名を貰った。

途中、俺が笑顔を見せると、みんなの顔が真っ赤になった。なんなんだろうな？

まあ、夏侯惇もとい春蘭から勝負を申し込まれたて、軽く瞬殺したり、

桂花から無茶苦茶なことが言われたりしたのは言うまでもない。

「おお～～！　でつかいな～～！！」

村から移動すること約１２刻（３時間）、俺達は華琳が収める陳留へとやって来た。

移動している途中、みんなには俺の里のことなんかを話した（もちろん、桃香たちにもちゃんと話している）。

途中、義父との修行しゆくのことを話したときは、少し思い出してトランスった時は、みんなの同情の視線を受けた。

そして陳留場内に入った瞬間、中央にある城を見て、俺は驚いていた。

「そう？　普通の城だと思うけど？」

俺が驚いているところへ華琳が言う。・・・って、これで普通ですか？　華琳さん

「そんなこと言ったってさ、俺城なんて見るの初めなんだよ」

「？　そうなの？　天には無いの城？」

「いや、あることはあるんだが、俺が住んでいた里の周囲には無かった。だから、実物を見るのは初めてなんだよ」

「そうなの、まあ今日はゆっくり休んで頂戴、部屋には侍女に案内させるわ」

「わかった」

俺は華琳に呼ばれた侍女に部屋に案内してもらった。その後は、しばらく部屋でゆっくりしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1586y/>

恋姫～朱い目を持つ青年～

2011年11月15日12時06分発行